

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」における‘暗黒の力’

鈴木 進

Men's accidents are God's purposes.

—Sophia P. Hawthorne

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」(“Roger Malvin's Burial”)が“Rappaccini's Daughter”や“Young Goodman Brown”などとともにナサニエル・ホーソーンのもっと優れた短編作品集『古い牧師館の苔』(*The Mosses from an Old Manse*)に収録、出版されたのは1846年のことであった。しかし「ロジャー・マルヴィンの埋葬」の活字になった最初はそれよりも14年も前の1832年、*The Token*誌上においてである。その間2回も短編集への収録が見送られたのは、この物語(テール)が当時の一般読者にとって難解かつ複雑すぎるとの恐れがあったためではないかといわれている。

実際、短編「ロジャー・マルヴィンの埋葬」は幾様にも解釈できる作品として多くの批評家を惑わせてきた。特にその結論をめぐる、例えばH. H. Waggonerは「ルーベンの犯した罪は一連の選択を誤った結果からくるものであり、同時に宿命的因果の結果¹⁾」と述べている。フロイド流の解釈でよく知られているFrederic Crewsはルーベンが義父となるべきロジャー・マルヴィンを置き去りにした理由を、娘ドーカスをめぐる性的ライヴァル関係としてとらえ、息子サイラスを殺すことはその罪意識から解放されるため²⁾と解釈する。その他にも神学的、心理学的、文化人類学的批評、さらにニュー・ヒストリシズム、フェミニズム批評等々、まさに百家争鳴の感がする。

ホーソーンが「ロジャー・マルヴィンの埋葬」を書いたのはかなり早い時期、Chandlerはそれを1825年とも推定している³⁾。可能性として最も早いのが1825年、遅くとも29年とする執筆年代は作品を取り上げる上で重要な意味をもつと考えられる。なぜならこの小説は作者自らが述べている通り「ラヴェル

の戦闘」という植民地時代の史実に題材を得て書かれている点、そして先にふれた執筆時期にホーソンはその構想をあたためていたか、あるいは書き始めていたとするならば、それはまさにラヴェルの戦闘百年を記念する祭典として彼の周辺は沸きかえっていた時と重なる筈だからである。

それではホーソンを含めて、事件百年後のニューイングランド・アメリカ人たちは史実をどこまで正確に知っていたのか。そして彼らが知り得た事実のどの部分を選び「いつになく詳細に記録」したのか。ホーソンのいう「合法的ではあるが目立たなくされたある種の事情」とは何なのか。そこに、記録した者たちの何らかの論理を感じさせないとはいえないが、そのような詮索は当面のわれわれの任務ではあるまい。

しかしニューイングランド住民一般の間に「ラヴェルの戦闘」として広く知られていた事件についてはホーソンの作品との差違を知るために、ひとことだけ触れておく必要がある。D. S. Lovejoyによればそれは1725年5月9日、Captain John Lovewellの率いる34名(Dunstable出身者たち)がニューハンプシャー州に近いFryeburg(現在はメイン州)でPigwacketインディアン80名と遭遇し壮絶な戦いとなった出来事であった。Lovewell他数名は戦死、生存者のうち特に4名は傷が重く助けを待って戦場近くに残された。2人は生きて荒野を彷徨し、2人は非業の最後を遂げたという⁴⁾。

ラヴェルの戦闘百年祭には植民地人の勇敢さを讃えるために上記のような伝説を題材としてホーソン周辺の詩人たち、例えばBowdoinのThomas C. Upham教授はバラッドを書き、Bowdoinの同級生ロングフェローも詩を作っている。読書と創作修業中のホーソンもまた関係資料を求めSalem Athenaeumから*Collection, Topographical, Historical, and Biographical* (John FarmerとJacob B. Moore編)を借り出した記録がある、とG. Harrison Orianの研究が教えてくれる⁵⁾。これらの刺激を受けてホーソンが「ロジャー・マルヴィンの埋葬」を書いたことは想像に難くない。

同じ事件を素材として作品化する場合、作者の意図がそれぞれどこにあるかによって作品は大きく違ってくる。試みにロングフェローの“The Battle of Lovell's Pond”⁶⁾をとりあげよう。Quatrain, 16行の短い詩であること、作られたのが彼の極く若い時の作品であったことを勘案してもやはり先祖の勝利と栄光を讃えることばを連ねた凡庸な作品に終わっていることは否めない。

ホーソンの場合も「ある種の事情」(certain circumstances)なるものについて

て何らかの操作をしたと思わない訳ではないが、彼の場合作品そのものから、ひとつの明確な意図のもとに執筆されたことが読みとれる。それは物語の結論において明らかにされる「罪とその贖いとしての犠牲」という聖書の中心的テーマにおいて他にないと筆者は考える。ルーベンのあの苦悩と、ただ一人の特別の子サイラスを祭壇にも酷似した岩の傍らで射殺するという結末は義父との性的ライヴァル意識からくる罪意識を精算するための手続きなどではない。ましてやインデアンを虐殺したことに対するアメリカの過去への贖罪としてしまう読み方にも疑問を覚える。あれは罪意識ではなく罪そのもの、律法をも越える原罪と呼ぶべきものとその旧約的贖いをテーマとしている物語である。ルーベンの苦しみは人間である以上誰しも避けることの出来ない、人間存在そのものもつ矛盾から生じる問題であろうと考える。

ホーソーンはこの作品の場合もいつものように歴史的事件を外枠として用いながら物語本体は史実から離れ、彼の創作したプロットを効果的に、印象的に、統一的に描いてみせる。前述のテーマを設定し、隠された罪に責め苛まれていく一人の人間の心の真実を描くプロットをつみ重ね、その結果必然的にあのような終結場面に達せざるを得ない緊密な構成に仕上げているのである。さらにそれらを支えるための背景描写、象徴的な道具だて、聖書からの引用暗示が多少目立つと言えなくはないが、全体としてそれらが渾然一体となり文学としての質を高めていると思われる。

この小論は以上のようないわばカルヴィン主義的視点から「ロジャー・マルヴィンの埋葬」という作品を読もうとする試みである。『古い牧師館の苔』の出版4年後に“Hawthorne and His Mosses”の評論の中でメルヴィルが提示した「生まれながらにして墮落と原罪を有するとするカルヴィン主義的⁷⁾感覚」がこの小説にはどのように現われているかを考えてみようと思う。

手順としてはホーソーンが作品執筆に用いたと考えられる資料を先ずおさえ、それが実際の作品にどのように生かされているかを知る必要がある。次にそのソースをもとにあのような結論へと導いていったストーリーの構成について考え、最後に主題を支えるためになされたさまざまな技巧を考察したいと思う。

先に述べたように物語のソースといわれる *Collections II* の記事には、あとで述べるホーソーンのもの⁸⁾と共通するいくつかの記述があることを指摘しておく。

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」には最初にその史的背景を述べる短い序があ

り、それに続く物語本体は4つのセクションから構成されている。導入部は深い森の中をインデアンとの戦闘によって負傷した2人の兵士、ロジャー・マルヴィンとルーベン・ボーンが自分たちの村へたどりつこうとしている場面で、そのセクションを仮に④と表わすことにしよう。次の展開部ではひとり故郷に辿り着いたルーベンがドーカスと結婚したものの、マルヴィンを置き去りにしてしまったとの思いに苦悩する18年間、この箇所を⑤とする。結論部は二つに分かれ、その前半は破産したルーベンの一家が新たな開墾地を求め森の奥へと移住する途中で、それとは知らずマルヴィンと別れた岩のそばに夜営する。物語発端部と同じ森の場面であるからここを④'とし、後半は④の18年後のあの場所、あの背景のもとに、日時も同じくルーベンがドーカスの父を見捨てたあの5月12日に、想像を絶するような出来事によって罪の贖いがなされる、ここを④"とする。このように見えてくるとストーリーは④森→⑤村→④'同じ森→④"森の中の同じ場所という循環構成になっていることがわかる。この図式の④から始まりふたたび④に戻るという構成の中には、後に述べるように作品に込められた作者の思想のひとつがみられる。そして物語の多くの部分をしめる森の場面に込められた象徴も思わされる。

④の導入部における背景としての森は「獣のほえる荒野」という表現で明らかのようにニューイングランド　ピューリタンの抱く荒野観に基づいて描かれている。森は深淵と暗黒の領域で、悪魔の住む所でもある。それは次のような箇所に象徴的に見られる。自分自身深手を負っているルーベンがあくまでも残ってマルヴィンの看護をすと言い張る。するとマルヴィンはルーベンが村へ帰る途中救援隊に出会うことになれば自分にも助かる可能性が出てくる、と説得にかかる。それはあくまでも若者の幸福を願う善意のことばでありながら作者は「策を弄す」「to wile」という語を用いているのはなぜだろうか。ルーベンは本来戦友のために「死に至るまで忠実」(「黙示録」2:10)な人物であったものを、その彼の心に利己的な欲望をはいり込ませたマルヴィンの存在は、この場が深い森の中の出来ごとであるがゆえに誘惑する者を連想させるのである。

マルヴィンはさらに追い打ちをかけるように、「娘の婚約者でもある若者が生き残ることは自分のためではなく娘のためなのだ (if not for your own sake, for hers who will else be desolate⁹) と。その時までルーベンの意識の下に眠っていた自分だけ生きのびたい (desire for existence) という利己心が相手のことばによって目覚めさせられ、正当化されたのだ。自分の未来の幸福を手にするため

に、目の前のマルヴィンが足手まといになるという思いに彼は打ち克てない。しかしそれに気付く「このような時に幸福を思いえがくことが罪でありかつ愚劣であると彼は感じた」とある。ここで用いられた「罪」という言葉にはもちろん“sin”が当てられている。

若者をついに立去らせるよう導いたマルヴィンは最後に自分の亡骸の埋葬の儀式を約束させる。しかし血をかけたその誓いを果たせなかったためにルーベンは18年間苦しむことになる。

あれかこれか、極限状態におかれた者の選択の場面の心理、会話はすべて作者の創作であるが前述の Farmer と Moore の資料からホーソーンは特に2つの行動を借用している。そのひとつは、後に目印になるように血の滲んだハンケチを檜の若木の枝に結びつけることであり、もうひとつは立去りかけたルーベンを呼びもどした老人が傍らの大きな岩に自分の体を凭せ掛けさせてもらうということであった。それらは後に効果的な伏線となっていることがわかる。④のセクションは他のそれらに比較しマルヴィンが瀕死の状態であることを考えると不自然なくらい長いとの印象を受ける。しかしこの物語の主題のためにはそれが必要な exposition なのであろう。

ルーベンはヘスターのような律法に背く罪は犯していないものの「この上なく正当とよべる行いをしてる際にも時として人を苦しめるある種の罪の感情」に心が苛まれる。行動の背後に利己心があると主人公が意識するゆえ物語はいつそう暗い、深い罪のイメージと結びつくことになる。

⑤の展開部は力尽き倒れているルーベンが救助隊に発見され一番近い村へ連れて帰られるところから始まる。そこがたまたまドーカスの住む自分の村だったという設定にわれわれは何か不自然さを覚えるが、このような偶然はこの箇所だけでないことから作者は偶然の果たす効果を十分に計算していることがわかる。これについては後に述べよう。

ルーベンの回復を待ってドーカスは恐る恐る父親の消息を口にすると、“his life had ebbed away fast; —and—”。ルーベンが更に語を継いで言おうとしたとたん “He died ! exclaimed Dorcas”, ドーカスの言葉に先取りされて事の真相を告げる機会を逸してしまう。さらにドーカスがたたみかけるように “You dug a grave for my poor father, in the wilderness, Reuben ?” と問う。彼の返事は “My hands were weak, but I *did* what I could,” (イタリックス筆者)。この問答は噛み合っていない。英語の代動詞は状況から「埋葬した」という内容

以外にはとれないが、これをルーベンの嘘と断定してしまってもよいものだろうか。しかしそれに続けて“*There stands a noble tomb-stone above his head,*”¹⁰⁾ (イタリックス筆者) と自動詞で表現しているルーベンの心に利己心が働いたのは明らかである。不完全なことばによるコミュニケーションがしばしば人生に影を落とすことはある。しかしルーベンは利己心に動かされ、ことばによって真実を語らなかった結果その後の人生をさらに暗い罪を背負って歩むことになる。

村人たちもドーカスからの不十分な情報の上に、その欠けたる部分は勝手に騎士道精神で補いルーベンをヒーローに祭り上げてしまう。彼はその誤りを訂正する勇気を持たない。それゆえルーベンはディムズデイルと同じく偽りに立つ讃辞に一層苦しむのである。

臆病と隠蔽はルーベンを悲しく沈んだ怒りっぽい人間に変え、人々から切り離された存在にしてしまった。疎外と孤立はホーソーン作品においてはしばしば罪の代名詞として用いられる。彼はなぜ妻や村人たちに事実をありのままに告白できないのか。それを妨げるのは①彼の臆病さ、②妻の愛情を失う恐れ、③世間の軽蔑と非難の恐れからである。そしてマルヴィンとの埋葬の約束を未だ果たせず、時として自分は殺人犯 (murderer) ではないかとの思いに駆られてもなお行動を起こせない。ルーベンはそれに対してまた自分に次の言い訳を用意する。①時を逸してしまった今となっては友人の助けを求めることができない、②一人で荒野に出掛けることへの辺境の人特有の迷信的恐れ、③マルヴィンと別れたあの場所への道を探そうにもそのすべがない、と。

利己心にとらわれるルーベンは怠惰な農夫であり、彼の農場は年々荒廃していくのだった。彼の怠惰な姿勢は、勤勉による繁栄こそ神の祝福の証しと信ずるピューリタン社会の倫理に背く神への反逆と考えられる。このように、生きながらにして村社会の中では死んだ状態にあるルーベンにとって唯一再生への希望はドーカスとの間に生まれた一人息子サイラスであった。

④、結論前部は、数年にしてルーベンが遂に破産をし村を去り、森の奥深く新しい開墾地を求める旅の途中の場面である。不思議なことに息子の忠告にもかかわらず、ルーベンは予定した進路から何度も外れて、北の方向に引き寄せられてしまう。日没を前に一家は窪地に露營することになる。作者がこの場に用意する道具だてはドーカスの手にするその年のマサチューセッツの『暦』である。ドーカスは『暦』を開きその日が5月12日であると夫に告げる。偶然と

も思えるその日こそ18年前にルーベンが彼女の父を置き去りにしたのと同じ日だった。父と息子は夕食のために獲物を求め、それぞれ別の茂みへと入って行く。ルーベンは獲物と思われるもの目掛けて銃の引金を引く。銃声をサイラスの手柄と信じ駆けつけた母親は巨大な岩と樫の木の根元に愛する息子が横たわっているのを見たのだった。ルーベンは岩を指さしながら「この幅広い岩こそお前の近い身内の者の墓石 (the gravestone of your kindred) なのだよ」と妻に告げる。その時傍らの樫の木からハンケチを結わいた枝だけが枯れて破片となって四人の上にふりかかった。ルーベンの目から涙が「水がほとぼしり出るよう」に落ちる。

作者は物語の結末をテーマにふさわしくこう結ぶ。「怪我を負った青年が生きる望みのたたれた男にたてた誓いは果たされることになったのだ。彼は罪贖われ——呪いは解かれたのだった。彼にとってはおのれの血よりも大事な血を流したこの時に長年出来ずにいた祈りが初めてルーベンの口から天に達したのだった」。

この結論がはたして罪意識を払い除ける心理的カタルシスだろうか。あるいは *Deus ex machina* の登場に逃げてしまってよいものだろうか。そうではなくこれはまぎれもなく罪とその贖いなのだ。ルーベンの罪は完全に贖われた。なぜならここにルーベンの真の悔い改めがなされたからこそ彼の祈りが神に受け入れられたのだから。しかも『緋文字』23章のディムズデイルがそうであったように悔い改めと告白の両方がなされたのだ。仮にルーベンがひとりでマルヴィンの白骨を探しあて、ひそかに埋葬することが出来たとしたら彼は罪許されたであろうか。ルーベンはドーカスに向かい、あのような形ではあったが告白もしたのだ。告白の伴わない悔い改めは不完全である。このようにホーソンの作品における告白のもつ意味の重要さがここにもみられる。

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」という作品のテーマを罪とその贖いとしてとらえ読んできたわれわれは当然それを支える聖書の暗示が鏤められていたことに気付いている。そのひとつは登場人物のストーリーにおける役割と聖書の人物との関連であり、二番目には背景描写に用いられている聖書からの引用である。そして三番目は setting の道具だてとその象徴、最後にカルヴィン主義的ピューリタニズムの教義、特に摂理と選びについてである。ホーソンはこれらの要素を架空のストーリーの中で効果的に用い文学作品に仕立てている。

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」を聖書との関連で論じた代表的論文に

Thompson の ‘The Biblical Sources of Hawthorne’s “Roger Malvin’s Burial”¹¹⁾’ がある。この論文における Thompson の主張はホーソーンの世界の主要人物名と聖書の中のそれらを照合しようというものである。ホーソーンの世界におけるルーベンと息子サイラス、さらに妻ドーカスについてこう述べている。先ずルーベンが「創世記」37章21節に記されているヤコブの長男 Reuben に当たることを指摘する。さらにそれは単なる名前の一致に止まらず、物語における役割が二人とも、その置かれた状況のもとに已むなく愛する肉親を荒野に置き去りにしなければならなかったこと。さらに立ち去る時点においては再び助けに戻るつもりであったもののそれを果たすことが許されず、そのため罪の意識に苦しむ。また置き去りにした事実を告げることが出来ずその後の人生を祝福のない惨めな状態で歩まなければならなかったという共通点をあげている。このような Thompson の説はわれわれを納得させる力がある。

ルーベンの息子サイラス・ボーンは「イザヤ書」44章28節に出てくるペルシャの Cyrus 王と同名であるという。そして二人を人々の救済者としてとらえている。「イザヤ書」における Cyrus 王は捕囚されたイスラエルを解放する救済者であり、ホーソーンの小説におけるそれは一族の父、未来の村の指導者となる使命をもっていたがその死をもって父ルーベンの罪を解き放つ救済者になったという。

ホーソーンの世界中唯一の女性ドーカスという名は「使徒行伝」9章36—42節の Dorcas と同じである。彼女については ‘good woman’ であるというだけでごく僅かな関連しか見い出せないという。ただし前述の Cyrus 王の記事（「イザヤ書」45章）のすぐ後の47章、バビロンの娘とドーカス・ボーンのイメージがよく似ているとの指摘がある。

それではマルヴィンはどうなるか。Thompson は “It is significant that of four principal characters in the narrative summarized about, all *but* Roger Malvin himself have names of Biblical origin¹²⁾” (イタリックス筆者) としてマルヴィンと聖書との関連を探ろうとはしてない。

ホーソーンは自分の世界の登場人物が「架空の名前にかえられている」と述べているゆえ、Thompson の論文の着目に興味を覚える。ホーソーンが登場人物の命名にあたって聖書を拠り所としたことは、そのテーマを考えあわせると十分想像がつく。ニューイングランド ピューリタンたちは旧約聖書を自分たちの子型としてとらえ、子供の命名にも好んで聖書の人物の名前をつけた。そ

のような伝統の中でメルヴィルは『白鯨』の登場人物を考え、ホーソーンも同じ技法をとったといえるであろう。

旧約聖書の影響はこの物語の背景描写と事物を寓意的に表現する技法にもあらわれている。背景となる森は“howling wilderness”，「申命記」32：10からの引用であり、先に述べたようにそこは人間を誘惑する者の暗躍する所でもある。ヘスターがディムズデイルを惑わせるのも深い森の中のことであったことを思い合わせる。森の描写にはまた“sword of the wilderness”（「哀歌」5：9）との表現も見られ、これも旧約聖書からの引用である¹³⁾。

暗い森は人間の理性を狂わせる所であり、同時にホーソーン作品においては森を含めた自然が人間の心と共鳴するものとしてしばしば描かれる。この物語でもマルヴィンを森の中に一人残して立去るルーベンに対して「あたかも自然の顔には死すべき人間の苦しみと悲しみに同情するかのよう、暗影を投じていると思われた」と述べている。

しかしこの作品で自然のセッティングが最も効果的に用いられ、テーマと密接に結びつけられているのは何よりも岩と櫛の木に込められた象徴であろう。④においてマルヴィンが身を凭せる岩の表面には碑文を思わせる石理文様が浮き出ている。発端状況に備えられたこの道具立てが物語の悲劇的結末を先ず暗示する。

P. Carlsonはその点に注目して“rock image”とプロット構成の技巧を指摘している。Carlsonは④においてそれは“gravestone”の他に、十戒第六の戒めが刻まれた“tables of stone”ともとれる。そしてさらにルーベンにとっては村までの“mile stone”にもなり得よう。彼が櫛の枝にハンケチを結んだ時にはその上によって“stepping stone”として用いられた。またルーベンの運命を決める選択の“touch stone”とも読める。③セクションではルーベンの心に重く押し掛かる存在でもあったであろう。そして結末の④¹⁴⁾ではわが子を捧げるための“altar stone”である、というのである。

物語の最後にルーベンの流す涙を形容する“and tears gushed out like water form a rock”は「イザヤ書」48：22からの引用である。岩からほとぼり出る水のイメージは渴けるイスラエルの再生であることからいえば、罪の死の状態にあったルーベンがこれによって再び生きることにつながる象徴ではないだろうか。

岩の傍に生える櫛の若木について読者は誰もが気付いている。物語の発端に

おいては背景をなす一本の若木にすぎなかったものが、血染めのハンケチを結びつけられた時からルーベンの人生と深く関わるように運命づけられた。若木は若きルーベンの象徴であった。しかしルーベンの運命の変化が檜の木成長に投影し、物語の最後においてハンケチを結んだ枝だけが胴枯病にかかり、ひからび、完全に死んでいた。「だれが犯した罪によってその枝が枯れることになったのだろうか」。作者は反語ともとれる疑問によってルーベンの罪を強調する。仮にサイラスがあのような死にあわなかったとしたなら、彼は村の「未来の指導者」として、その一族は代々栄えたかもしれない。檜の木はその場合には、family treeにもなり得たであろうに。

ルーベンがはからずもマルヴィンとの約束を果たすことになったときとところにもう一度目を止めてみよう。それはまさに18年後の5月12日、場所もマルヴィンを残した大きな岩と血染めのハンケチを結んだ檜の木の根元においてではなかったか。ルーベンをあのように長い年月の間躊躇させたのは、その場所へ行く道がわからなかったからではないか。ところが村に居る間も「絶えずある種の衝動、かれにのみ聞こえるひとつの音がした。それは出掛けてきて誓いを果たせと命じるものである。ルーベンが誓いを果たそうとするならばまっすぐにマルヴィンの白骨に導かれるのではないかという不思議な感じがしたのだ」、とある。その声とは一体誰のものだったのか。

さらに新たな開拓地を求める旅の途中、進路を操作してその場所へ導いた「不思議な力」(supernatural power)とは何だったのか。

⑧のセクションの初め、ルーベンが救援隊に発見され、最も近い開拓地に運ばれたがそこはたまたま彼自身が住んでいた村だった。これらのことは不自然と考えるよりも、この物語に一貫して流れるホーソーン思想、それを摂理として受け止めるべきものであろう。それを作者は「御旨によりルーベンに己が罪を贖う機会が備えられたと確信する」(He trusted that it was Heaven's intention to afford him an opportunity of expiating his sin¹⁵⁾)といわせている。

このような出来ごとは単なる偶然や人間の計画でなく、神の摂理が罪を贖わせるためルーベンを押しやった。ホーソーンが物語に込めたのはこのことだったのだ。

ホーソーン考えでは、人間の目には偶然としか映らないことの背後に神の意志が働いているというのである。ルーベンの一家は破産をし村に残ることができなくなる。家族が新たに開墾地を求めて森の奥に移住せざるを得なくなる。

そのような、不幸としかいいようのない運命に陥るのはなぜなのか。このように何度か人間の理解を越えた“supernatural power”と“supernatural voice”に導かれ、18年前のあの場所に再び戻ったのはすべて自分の罪を贖うために備えられた神の計画に他ならないとルーベンを受容したのである。

ルーベンは18年間心に秘めてきた事実をあのような形で妻に告白することができた。確かにそれはディムズデイルの場合と比較すると変則的ではあるが。もしもルーベンが告白をしないままに死を迎え葬られることになれば、彼の墓の上にそれが黒い雑草として生えてきたのであろう。秘密を告白する力はルーベン自身にはなかった。「神のお恵みによる以外には秘密を明らかにする力はありません¹⁶⁾」。こうしてルーベンは初めから罪贖われ、救いに入れられる者のカテゴリーに予定されていたのだ。彼の人生経験すべてが救いの兆候を示すものとしてアレゴライズされたものなのだ。人間の意志や力はそれを避けられない。これがこの小説に込められたホーソーンの考えなのである。

それでは最愛の息子を自らの手で射殺することがどうしてルーベンの救いに繋がるかといえるのだろうか。実にこの不条理としか思えない計らいの中にカルヴィニズムの予定説・神の選びの教理が読みとれる。全能の神の手がこの世界で絶えず働き、ルーベンの人生をも支配してきた。彼の罪が許されるためには罪のない人が死ななければならない。ホーソーンがこの小説にこめた意図は、人間の理解の及ばない神の計画がある、ということであろう。ここでのサイラスは勿論キリスト・イエスによる贖い（アポルトロセオース）ではなく、旧約的な動物に代わる供え物としてではあるが。

ホーソーンを論ずる Harry Levin はその *THE POWER OF BLACKNESS* の中で「カインの呪いがアダムの子孫の身にふりかかっている。アダムの子孫の運命は『ロジャー・マルヴィンの埋葬』の中に儀式化されている¹⁷⁾」と述べる。親の罪が子に及ぶ（The sins of fathers are visited upon the children¹⁸⁾）という言葉通りといえよう。Levin はそれに続けてルーベンの罪からの救いについて「その唯一の贖いの方法はいけにえを捧げることによる。あらゆる人に定められた到着点とはそのようなことなのだ」と。つまり Levin の主張をひとことと言え「原罪とその贖い」ということになろう。Levin はこのようなホーソーンを「神学においてでなく心理学におけるカルヴィニスト（a Calvinist in psychology）¹⁹⁾と呼ぶ。

このように「ロジャー・マルヴィンの埋葬」の作品に限定していえば、ホー

ソーンは作品を通して神の摂理、選び、原罪、改心といったカルヴィニズムの根本的教義を心理的に、精妙に文学として描くカルヴィニストと呼んでよいだろう。Levin の言葉を借りるなら、彼は勿論カルヴィン神学者ではない。またカルヴィン心理学者でもない。何よりもホーソーンは想像力によってカルヴィニズムを架空の物語(テール)に再構成する芸術家なのだ。その技巧においては物事に寓意的意味を与え、自然に対して超自然的なものと結びつけ、精神的観念に象徴的役割を果たさせるのだ。

メルヴィルがホーソーンに引かれたのはそこにある。メルヴィルはそれを「恐ろしいほどの真実を感じさせる」ホーソーンの「暗さ」によるのだ、そしてまたそれを支えている文学的技巧であり、アレゴリーとシンボリズムであり、さらには作品における緊密さであるといった。メルヴィルは“Hawthorne and His Mosses”の中で“*Young Goodman Brown*”を「ダンテのような深味のある」作品と称讃を惜しまないが、そこにふれられてない「ロジャー・マルヴィンの埋葬」もまた同じ讃辞を与えられるべき作品であるといえよう。

注

- 1) Hyatt H. Waggoner, “The Tales; The Discovery of Meaning”, *Casebook on THE HAWTHORNE QUESTION* edited by Agness Donohue (Thomas Y. Crowell Company, New York, 1963), p.96.
- 2) Frederic C. Crews, ‘The Logic of Compulsion in “Roger Malvin’s Burial”’, *HAWTHORNE, A Collection of Critical Essays*, edited by A. N. Kaul, (Prentice-Hall, Inc. N. J., 1966), p.113.
- 3) Elizabeth Lathrop Chandler, *A Study of the Sources of the Tales and Romances Written by Nathaniel Hawthorne before 1853*, (Smith College Studies in Modern Language, 1926), p.55.
- 4) Neal F. Doubleday, *HAWTHORNE’S EARLY TALES, A CRITICAL STUDY*, (Duke University Press, Durham, North Carolina, 1972), p.193.
- 5) *ibid.*, p.192.
- 6) Introduction by George Monteiro, *The Poetical Works of Longfellow*, (Houghton Mifflin Company, Boston, 1975), p.645.

THE BATTLE OF LOVELL’S POND

Mr. Longfellow’s first verses, so far as known, printed in the *Portland Gazette*, November 17, 1820.

Cold. cold is the north wind and rude is the blast

That sweeps like a harricane loudly and fast,
As it moans through the tall waving pines lone and drear,
Sighs a requiem sad o'er the warrior's bier.

The war-whoop is still, and the savage's yell
Has sunk into silence along the wild dell;
The din of the battle, the tumult, is o'er,
And the war-clarion's voice is now heard no more.

The warrios that fought for their country, and bled,
Have sunk to their rest; the damp earth is their bed;
No stone tells the place where their ashes repose,
Nor points out the spot from the graves of their foes.

They died in their glory, surrounded by fame,
And Victory's loud trump their death did proclaim;
They are dead; but they live in each Patriot's breast,
And their names are engraven on honor's bright crest.

Henry.

- 7) Herman Melville, "Hawthorne and His Mosses," *Casebook on THE HAWTHORNE QUESTION*, edited by Agnes Donohue, pp.257-258.
- 8) Farwell was afterwards engaged as Lieutenant in Lovewell's fight, and in the commencement of the action was shot through the belly. He survived the contest two or three days, and with one Eleazer Davis, from Concord, attempted to reach home. They were destitute of provisions, and finding some cranberries, greedily devoured them. Those eaten by Farwell came out at his wound. Though his case was hopeless, Davis continued with and assisted him till he became so weak as to be unable to stand, and then, at Farwell's earnest entreaties that he would provide for his own safety, left him to his fate. Previous to this he had taken Farwell's handkerchief and tied it to the top of a bush that it might afford a mark by his remains could the more easily be found. After going from him a short distance, Farwell called him back and requested to be turned upon the other side. This was done, and was the last that was known of him. Davis reached Concord in safety.
- 9) Nathaniel Hawthorne, "Roger Malvin's Burial", *MOSSSES FROM AN OLD MANSE*, (Ohio State University Press, 1974), p.340.

- 10) *ibid.*, p.348.
- 11) W. R. Thompson, *PMLA*, LXXVII, Number I, (March 1962), pp.92-96.
- 12) *ibid.*, p.92.
- 13) 小山敏三郎編注, *Selected Tales of Nathaniel Hawthorne I*, (南雲堂, 1973) p.226.
- 14) Patricia A. Carlson, *HAWTHORNE'S FUNCTIONAL SETTINGS*, (Rodopi N. V., Amsterdam, 1977), pp.153-160
- 15) Nathaniel Hawthorne, *op. cit.* p.356.
- 16) Nathaniel Hawthorne, *THE SCARLET LETTER*, (Ohio State University Press, 1962), p.131.
- 17) Harry Levin, *THE POWER OF BLACKNESS*, (Ohio University Press, Athens, 1969), p.55.
- 18) Exodus, 20:25
- 19) Harry Levin, *op.cit.*, p.55.
- 20) Herman Melville, *op. cit.*, p.265.